

一ムール組下の軍兵を上陸せしめ、砦等數ヶ所を乗取、大砲
 を釘打砦籠居候唐國軍兵ハ逃去候由其上又々面談之有無
 并返答承知致度右返答無之候ハ、尙嚴重之手當可致旨掛
 合候得共更ニ返答無之ニ付セムール一手軍艦之内蒸氣
 船ハルラコウタより奉行所ハ一丸を發し其上ニ而又々同
 様掛合此上にも返答無之候ハ、廣東一圓燒拂可申旨掛合
 候而も更ニ取合不申候ニ付軍艦貳艘より數丸打發し廣東
 外曲輪を打崩候而セムール并官吏共其外士官五六輩を引
 纏ひ奉行所ハ押而參候處奉行職者役人不殘召連立去居候
 ニ付面會不叶引取候上乘取候砦數ヶ所放發いたし奉行所
 并役人の居宅も燒拂其上よて又々日夜懸合若シ返答無之
 候者廣東を燒拂可申然ル時者老幼男女之死亡も有之實ニ

不仁之儀ニ付是非返答有之儀掛合候處其節漸く返答有之
 候得共至極不相當之事ニ而殊ニ面會許諾不致候ニ付無是
 非軍艦砦より十四日之間致放發廣東燒拂候由其砌アメリ
 カ佛蘭西軍艦も廣東碇泊致居候其軍兵を令上陸候由尤是
 者廣東亂妨之爲ニ無之廣東ニ有之候其國々の商館并人民
 警衛の爲ニ遣し候由評判記ニ書載有之其餘此度之一件者
 唐國奉行職之不明より事起り、嘆人理不盡之致方ニ無之多
 分此度者唐國より和議を乞ひ、嘆人の本意相立可申と廣東
 之居民風聞致候由書載有之候、扱日本も亞米利加之御條約
 相濟下田箱館御開ニ相成交易者未御免相成不申候得共金
 銀を以て品物相調或ハ品替又ハ官吏之滞在も御免有之候
 得者先ツ交易願之通相開候共申物ニ有之候又嘆國ハ御條

約相濟是ハ下田箱館長崎三ヶ處御免ニ相成下田箱館者亞
 米利加と相變候事も無之然るに長崎ふてハ内港々入帆不
 相成高銚島邊名邊ニ碇泊可致端舟を以乗上并上陸不相成其外
 廉々些細之御規定右様有之候而者嘆人ニ而條約取結候詮
 と無之候又魯西亞共御條約相濟候三ヶ所御免ニ相成候長
 崎よて外國夷人々御免許之通御所置可有之由然處魯西亞
 船長崎渡來之節者御所置魯人至極不服之由承知仕候尤沈
 沒之デイヤナ船下田よての御所置并難民御救助之次第者
 至極感伏之由承り申候右三ヶ國ハ世界中之強國よて魯西
 亞ハ世界中之最大國殊ニ御隣國よて味方ニ有之者無二之
 後楯ニ可相成敵ニ取候而者至極の大患ニ可有之間別而御
 懇情御施候者御安全之御良策ニ可有之右三ヶ國之外佛蘭

西之御條約可相濟事も近く可有之然者世界中之強國と唱
 候四ヶ國ニ不殘御條約相濟候間是迄之御國法御變革相成
 世界普通之御法ニ御改ニ相成度左も無之是迄之御法ふて
 ハ諸國ニ而承伏不仕正法の國と相唱不申候尤未條約不相
 濟國ニも箱館ふ於而病院御手宛相成候分者西洋人情に相
 叶至極御良善之御所置と可申候元來者日本者世界東方諸
 國の内一箇富饒の強國其人民英才有て唐國おとの及ふ處
 非も但し東國人民者自分を尊み他を卑むの癖ありと西
 洋人評判仕候拙者久敷日本ニ罷在見聞仕候ニ其説は相違
 無之日本も其癖者相見申候折々外國船渡來之節右船へ被
 遣候書翰之内御文言等心付候分者可申上旨ニ而爲御見ニ
 相成候處兎角御命令相成候様の御文言有之御頼と申文言

者曾而見受不申候御國內限り之義者兎角可申上様無之候
得共外國人々之御文言者御改ニ相成候様有之度和蘭人者
年久敷渡來御國風も粗相辨候間左様ニ者存不申候得共外
異國人者至極不悅義ニ御座候斯申上候迎日本ニ而他を賤
しめ候と申上候ふ者無之候得とも外國人之思處我も人彼
も人と申事其本意ニ候得者御書翰御文言を初メ御應對其
外一体自他尊卑無之様之御所置御肝要ニ奉存候一旦御取
結ニ相成候而者御太切之儀ニ候間御粗畧不相成様能く御
勘辨相成度奉存候元來條約之趣意者只親睦を旨ニ致し候
義ニ而紙上者細事書載候儀難相成萬事些細之事ハ可相成
丈ケ御沙汰不被成候而可然向く御糺之上可成程者狭く相
成候様之御所置ハ不可然只親睦之處を以御心掛ケニ相成

萬事廣く相成候様緩く御沙汰可然奉存候既ニ和蘭フアヒ
ユス下田箱館一見として罷越下田ニ滞在之アメリカ官吏
に面談仕候處日本ハ兎角小事ニ拘り些細之事申立候而已
返答將明不申無益之小事のみ申聞實ニ煩敷候間亞米利加
政府に申立別段可及談判杯噂いたし候由右様之事にてハ
漸く可及混雜候間得と御思惟相成度尙渡來之外國船申立
候廉有之節者可相成丈ケ速ニ御返答ニ相成度遅く候儀者
外國の風儀ニ相叶不申候間是又御含ニ相成度御免許可相
成程之義者速ふ御免ニ相成候方可然始御免許難成旨御申
聞ニ相成候義も強而申上候得者被差許候様ニ而者強而乞
候得者何事も被指許候様ニ心得可申實ニ御免許可相成程
之儀者速ふ被差許候得者御國体も相立可申強而乞ニ任せ

候得者御免許之名も薄く御國威も相減し却而申乞者の國威相増可申候兎角兵端者小事より起り候者ニ而此度唐國の弊も右等の事より起り候自分の弱と不知ニ智と申難く御國ふても能く御勘辨有之度尤御國ハ唐國程弱く候と申ニ者無之候得共久敷太平打續き歐羅巴程軍事ニ御馴不被成唐國者地面連續仕候得共御國者四方海岸よて一度兵端を聞き候而者至極御太切ニ可及候間能く御勘辨相成度唐國之一件只外國之事と御聞捨無之事情得と御賢察御所置御座候様仕度旨かひぬん申出候

安政四丁巳年八月

我カ海軍ノ基礎ヲ爲セルハ首トシテ教師諸人及ヒゲテイ

船將グアービス氏ノ誘導訓誨ノ厚キニ因ラスンハアラス
嗚呼其功忘ル可ンヤ又我カ開國ノ始ニ當リ領事官ドンク
ルキユルシユス氏ノ數度ノ忠告アリ唐山ノ覆轍ヲ引テ我
カ従前ノ倨傲ヲ戒メ以テ外國ニ接スルノ道ヲ悟ヲシメン
ト欲シ其諄々忠告ノ言ハ眞ニ當時我カ頂門ノ一針對症之
良藥ト云ヘシ是皆其良友懇篤ノ切ナルニ出テ其結果遂ニ
今日アルニ至リシハ我カ邦人ノ最モ感謝スヘキ處ナリ

傳習中教師學生共ニ新陳更替之現況

安政四丁巳年春ニ到リ傳習之事業大ニ緒ニ就クヲ以テ江戸ニ歸リ同地ニ操練所之設アラントス終ニ永井氏觀光艦ニ乗シ矢田堀氏其他乗組員ニ選拔セラレ長崎ヲ出帆セントス我

輩ハ陸地歸府之命アリ出立ノ前一日永井氏我ニ達シテ云教師書ヲ以テ告ルコトアリ新教師本年ハ來リ到ル貴國モ亦新生徒ヲ出タシ舊ト交替ノ議アリト彼我等シク新トナラハ甚タ不都合ナラン我カ教ヘシ生徒ノ中一人ヲ殘シ萬事ヲ周旋爲サシメハ如何且コツトル船未ダ成就セス製鐵所ノ機械モ亦既ニ到ラントス宜シク考フル處アレト此申立尤道理アリ唯今歸府ニ臨ミ此地ニ殘ス情ノ忍ヒサル所ナリ如何ト我考フ此事教師ノ言是ナリ教師未タ去ラサルニ弟子悉ク引去ル甚タ信ヲ失フ如シ我不肖ト雖モ斷然此地ニ止リ教師ノ歸國ヲ送り新教師ノ爲ニ微力ヲ盡クシ新生徒ノ方向ヲ指示セント永井氏大ニ悅ヒ終ニ議決ス又生徒中止マリ學フヲ願フ者四五名竟ニ觀光艦ハ同年三月四日江戸ニ向テ出帆ス

我此時望ミ乞フ箇條アリ永井氏歸府後政府ニ上言センヲ約ス後終ニ行ハレスシテ止ム

同月廿六日入帆乗員歸府

永井氏去リテ後傳習取締萬端之事當分此地ノ監察岡部駿河守督之五月江戸ヨリ監察木村圖書氏下リ來リ永井氏之跡役タリ此人温厚ニシテ能ク衆言ヲ容レ威權ヲ張ラサルヲ以テ多人數タリト雖モ内ニ紛擾之憂ナク皆其所ヲ得タリ
同年四月軍艦教授所ヲ築地講武場中ニ置ク令シテ曰ク
海軍御取建ニ付今般築地講武所御構内ニ於テ而御軍艦教授所御開シ和蘭より献上之蒸氣船ニ而操練相始候間御旗本御家人并悴厄介等迄有志之輩罷出眞實ニ修行可致候委細之儀者御目付永井玄蕃頭ニ可被承合候且又万石以上以下

陪臣之儀も其主人々々格別見込之者ハ稽古御差許相成候
間是亦玄蕃頭に申立候様可致候

右教授所役員ハ永井玄蕃頭總督ニシテ矢田堀景藏教授方頭
取タリ其它役々左ニ

教授方

- 佐々倉桐太郎
- 鈴藤勇次郎
- 濱口典右衛門
- 岩田平作
- 山本金次郎
- 小野友五郎
- 石井修三

中濱万次郎

教授方手傳

- 尾形作右衛門
- 土屋忠次郎
- 關川伴次郎
- 村田小一郎
- 鈴木儀右衛門
- 小川喜太郎
- 塚本桓輔
- 近藤熊吉

此時如左假規則ヲ定メ同年七月十九日開ク

御軍艦操練稽古規則

一 測量并算術	一六
一 造船	二七
一 蒸氣機關	三八
一 船具運用	七五
一 帆前調練	二ノ日
一 海上砲術	二八
一 大小砲船打調練	二三日
一 大小砲船打調練	廿三日

右稽古之儀者朝四ツ時より九ツ時迄晝後九ツ半時より八ツ半時迄日々有之候事

但正月十九日より相始十二月十九日相納候事

一五節旬朔望七月十三日より十六日迄并増上寺 御參詣演御成之節ハ稽古休ミ之事

一 稽古相願候者ハ各前書短冊操練所々差出可申候尤最寄次第御軍艦奉行宅々差出候而不苦候事

但諸家家來ハ左案之通使者を以差出可申事

右案左之如ク 短冊料紙美濃紙

長六寸五分

三ノヤ一木

何術

押領屋敷
宿所何所 何動何之 離地面借地敷
何動何之 離方同局

右御軍艦操練所々罷出稽古仕度奉願候

支月日

何御役
何御番
小普請

何之離支配敷

誰總領敷
次男敷
厄介

何之誰

支

何術

宿所何之誰 上屋敷 中屋敷 下屋敷

右御軍艦操練所に差出稽古被相願度主人申付ニ付召連罷出候

誰家來

何之誰 支 誰

何之誰 家來 召連人
何之誰

右貳枚ツ、差出聞届之挨拶承り其後勝手次第罷出可申候

但初而罷出候節者時之服麻上下着用朝四ツ時前迄ニ罷

出可申事

一着服之儀稽古始之日者熨斗目麻上下平日者畧服且伊賀袴

相用候而も不苦候事

一出席いたし候得者記録所に銘く之名札差出退散之節者其

段相届可申事

但産穢忌中等者右明候而罷出候節記録所に相違可申事

一御船く稽古運轉之節乗組罷越候者ハ風様ニ寄日歸し相成

兼候義も有之候間銘く頭支配陪臣之向ハ其主人に届之上

乗組候筈ニ候事

一大小砲船打調練之儀定日ニ者操練所内并小船ニ而火入稽

古いたし候事

水泳其外稽古規則

一水泳

五月十日より
八月晦日迄

一水馬

三八
五十

一艦手

正月十九日より
十二月十九日迄

右水泳艦手稽古之儀者朝四ツ時ヨリ夕七ツ時迄晴雨共稽古有之候事

但水馬者朝五ツ時揃之積尤手馬ふて稽古可致事

一正月十九日稽古始十二月十九日稽古納之事

一五節旬朔望七月十三日より十六日迄并増上寺 御參詣濱

御成之節者稽古休之事

一稽古相願候者ハ名前書短冊操練所ニ差出可申候尤最寄次

第御軍艦奉行宅ニ差出候而も不苦候事

但諸家家來者左案之通使者を以差出可申事

右案左之如

短冊料紙美濃紙

長六寸五分

右

水泳

艦手歟

水馬

宿所何所何動何之誰地面借地歟
何動何之誰方同居

右御軍艦所ニ罷出稽古仕度奉願候

支月日

何役
何御番歟
小普請

何之誰組
支配歟

誰總領歟
次男歟
厄介

何之誰

支

水泳

艦手歟

水馬

宿所何所何之誰
上屋敷
中屋敷
下屋敷

右御軍艦所ニ差出稽古被願度主人申付ニ付召巡罷出候

何之誰家來

何之誰

支

何之誰
家來
召連人

何之誰

右貳枚ツ、差出聞届之挨拶承り其後勝手次第罷出可申候事

但初而罷出候節者時之服麻上下着用罷出可申事

一着服之儀稽古始之節者熨斗目麻上下平日者略服且伊賀袴

相用候而も不苦候事

一稽古罷出候得者水泳記録所々銘々之名札差出退散之節其

段相届可申事

但産穢忌中等ハ右明候而罷出候節記録所々相達可申事

一遠町泳稽古有之節ハ前日出席所々張紙致し候間右ニ而承

知之事

但當日晝夕者御焼飯被下候事

安政四丁巳年夏コツトル船竣功水卸ヲナス

同八月五日兼テ和蘭國に依頼打建之軍艦ヤツパン後威臨艦
入津ス是レ三桅蒸氣艦ナリ新教師皆乗組則姓名如左職及モ

併セテ爰ニ記ス

一ヶ月

四百五十ギユルデン

指揮役

リツトルホイスセンフハンカツテンダイケ

三百廿五ギユルデン

第一等士官

ベデアフアントロイーエン

貳百廿五ギユルデン

第二等士官

ヨンクヘールハヲウ井グルス

同

醫官

ヨンクヘールボンベフアンメールドルフゾーンド

同

勘定役士官

セイユムコロフエ

六百ギユルデン

機關方士官

ハハルデス

三百五十ギユルデン

機關方

イハフアンアーケン

同

同

ナラススコイト
右二人四ヶ年ノ間此給料ニテ和蘭政府承諾

百ギユルデン

水夫頭
ウエラ ラツブル

同

同格
イハフルーシシキ

同

帆縫
デグヘルフスト
此者不行跡ニ付歸國

百五十ギユルデン

大工頭領
ヘルフ井

百ギユルデン

學校騎兵教授役
ベセンテユール

七十五ギユルデン

早業活版師
ケインドルマウン

六十五ギユルデン

水夫
ウエウエイカント

同

同
エフシキユルス
此者前同斷

同

同
イステークレンベルグ
已十月廿七日病死年三十八

同

同
セウエウエードデイキ
怪我致シ歸國三ヶ年御手當被下

同

同
アフアンレイン

同

同
エムイダイデレン
已十月廿日病死年四十九

同

同
イグーレマンズ

同

同
イペフェルレー

同

同
ウエコツク

同

同
ウエテースト

同

同
同太鼓教授兼
エスファンデルベルグ

同

同
ハファンデルクツク

同

同
イデキユツブル

百ギユルデン

兵卒組頭
エフセハンカライシルク
船中大砲歩兵并火器教授

六十五ギユルデン

兵卒
ウエハファンホーニョメン
初學者教授

百八十ギユルデン

釜師頭領
イグアンテクスセン
此者不行跡ニ付歸國

同

諸機軸細工師頭領
セハーウ井ンキ

同

鍛冶頭領
イヤンスセン

同 同 同 同 同
一ヶ月
五千七百三十五ギユルテン
一ケ年
合銀四百四十七貫目

同
イエフメースセン
諸細工頭領
イウイルテプール
轆轤細工師頭領
ウエビユルダ
銅器師頭領
イハウエイスセンピユルダ
離形師頭領
セフエルトカンブ
右八人ノ者四ケ年ノ間此給料ニテ和蘭政府承諾
同
三拾五貫八百四十三匁七分五リ

同年九月十六日舊教師商船ニ便シテ當地ヲ去ル此日咸臨艦
ヲ以テ新教師ト同伴商船ヲ港外數里ニ引キ順風ニ乗シテ別
ヲ告ク我一人此地ニ止リシヲ以テ教師之待遇甚々厚ク別ニ
臨ミテ共ニ黯然帆影猶眼中ニ入ルノ間白布ヲ振り其名ヲ唱
ヘ呼ンテ聲ヲ絶タス漸ク去ル遠キニ及テ艦ヲ横キリ五島近

傍ニ航シテ歸ル

是ヨリ先舊教師一書ヲ親書シテ我ニ送ル云

於出島千八百五十七年第二月廿八日

朋友勝麟太郎君へ

和蘭國王ノ命ヲ請ケ日本ニ渡リ日本人へ航海ノ初學教導
スルニ其任凡二年ヲ經ルニ及テ其學業肝要ノモノニシテ
名譽トナルヘキ事ヲ知ヌ我微力ヲ盡シテ任ヲ守リ和蘭政
府ノ趣旨ニ背カサルノ志ヲ定ヌ日本人至極優美ニシテ勝
レテ好學ナルヲ知ル事久シ日本人ノ性質所業等ノ事我書
中ニ見シ事アリ既ニ十七月餘貴身ノ日本人ト日毎ニ相交
ルニ諸事實ニ然ル哉否ヲ知辨スヘキ折柄ナリキ我勘考ス
ルニ我志望ニモ勝リシ處アルハ慥ニ知レリ日本滞在中日

本人ト相交リ我是ヲ觀ルニ其叮嚀聊妄ナラス優美ニシテ
精撰ナリ且我等ヲ愛敬ス諸學術多端アリテ是ヲ教示スル
時通詞ノ助ヲ受ルニ學端ノ言意通辨ナリ難キトアレト傳
習方數多ノ人々宜配慮アリテ倦ムトナク勉強アルヲ知レ
リ今日日本ハ外國民ニ携ルト甚少ク學術ノ場ニ至リテハ甚
相劣ルト雖モ我慮ルニ若今日日本外國民ト寛優ノ交接ヲナ
ストアラハ其學術西洋ノ國民ト同等ノ場ニ至ランハ必然
ナリ勿論彼ニ勝ルト易ラン如何トナレハ人相互ニ思慮練
磨シテ學業真正ノ明解ヲ得ル如ク諸國民トノ交接ニ因テ
學術モ相互ニ弘ルトヲ得

一國政ノ機ニ於テ日本政府ノ勘考ニハ軍務ニ携ル數多ノ學
術皆西洋學方コソ國ノ堅固獨立ノタメ緊要ノモノナラメ

ト又日本若今ノ境界ニ止居テ進マサラン時ハ外國小弱ノ
國人ニモ恣ニ壓伏セラルニ及ハント此故ニ日本和蘭國王
ノ芳志ヲ納テ今既ニ和蘭海軍一手ノ者滞在セリ小數ノ和
蘭人教導スル處ノ初學僅ニシテ日本大國ノ爲ニハ充分及
ヒ難シ軍務ニ屬ル學業其餘水夫ノ如キ我ヨリ以下ノ輩ニ
於テモ一圓見訓サル學術又ハ大概ヲ而已知ルカ如キ學業
ノ外ニ猶許多ノ學術アリ是等ハ土民安泰ノ爲メ必用ノモ
ノナリ故ニ我悦シキハ日本ノ人々數輩和蘭國ニ渡海アラ
ントノ由實ニ西洋ヲ見ハ日本改革必要ノ事ニシテ西洋ノ
事情ノ辨知ハ口授ニ因テセンヨリ功アリト覺ニ是其安泰
強勢ヲ進ルノ功最速ニテ最上ノ方便トス
一我朋友ヨ上ノ撰ヲ受ケ此肝要ノ任ヲ勤タモフトアラシカ

トノ由若其噂ノ如ク其事實ニ然ランニハ君ノ名譽ヲ深ク
祝スヘシ

一實ニ是肝要名譽ナラスヤ如何トナレハ君其任果テ歸國ノ
後西洋ニテ覺知ノ事情ニ因リ日本安泰ノ場ヲ辨知シタモ
フヘシ又其時同伴ノ諸人モ共ニ難忘ノ名譽ヲ得タマハン
カ故ナリ

一學術ニ於テ君ノ勉強君ノ伶俐ハ能ク知レリ君ノ蘭學ト又
彼任ヲ受タマフヘキハ顯然ナリ故ニ我ニ於テモ更ニ幸ナ
リトス

一君歸府ノ折君ノ幸福安泰ノ祝詞ヲ納メ愛敬交友ノ情ヲ常
ニ捨タマハスシテ再ヒ拜面ヲ樂ム我情ヲ思タマヘ

君ノ朋友

和蘭海軍船將次官

ペルスレイケン

舊教師去ルヤ其教授ノ勞ヲ謝シ我政府物ヲ賜フテ其禮ヲ表
ス則

當地ノ甲必丹傳習初發彼我ニ周旋セシ故ヲ以テ

甲必丹ドシクルキユルシユス氏ヘ

時服 拾

白銀 三十五枚

拵附刀 一振

時服 貳拾

白銀 十五枚

拵附短刀 一振

五ヶ年分給料其儘

時服 五

教頭ペルスレイキ氏ヘ

教師士官三名へ

白銀 十五枚
拵附短刀 一振
スガラ一氏ハ給料四ヶ年分
他二名ハ同三ヶ年分

下等士官其他一同へ

反物器物各差アリ
各給料二ヶ年分

同年九月江戸ヨリ新生徒下リ到ル則

小性組

秋山安房守組

久保紀之助

二條藏奉行

達之進總領

白井勇三郎

作事下奉行孫三郎仲
天文方澁川助左衛門手附出役
海老原傳次郎

寄合醫師

其甫總領

松本良順

小普請組石川主水支配世話取扱
三郎兵衛次男

万年恒次郎

書院番

戸川伊豆守組

小笠原鍾次郎

鍾次郎養方叔父

小笠原静五郎

書院番

白須甲斐守組

倉橋育之助

善書調所勤番

齋藤源藏

小普請組小笠原順三郎組
善書調所句讀教授出役

河野榮次郎

小普請組

小笠原彌八郎組

根津欽次郎

町野左近組徒

天文方足立左内手附手傳

岸本總次郎

小人目付

兼松龜次郎

小人頭

彦七郎次男

高松力藏

已十二月廿四日病死

大番堀田豊前守與力
若左衛門悱
善書調所句讀教授出役

設樂莞爾

西丸幕門番之頭
同 松下孫十郎組與力賢藏悱

荒井光太郎

先手
同 三浦美作守組與力吉澤雄之進次男

赤松大三郎

板倉主計頭家來

同 田島順助

箱館奉行支那組頭
勝之助總領
箱館江戸書物用出役

力石太郎

富士見實藏番
同 中山栄太郎組清之丞三男

高橋参郎

新潟奉行支配
支那勘定格廣間役附太耶梓
同

竹川龍之助

真火之番
太八耶梓
同

澤 鉄 太 耶

豊奉行格
普請方下奉行又右衛門總領
同沿革關出役又作總領
同

木暮東之輔

浦賀奉行組與力

朝夷健次郎

同

合原 操 藏

同上同心

柴田真一耶

安政二卯年ヨリ引續キ止ル者中島三郎助望月大象春山辨藏
飯田敬之助

其他同三辰年着崎之者總計十一名

新教師來リ新生徒到ル其教授之規則學術之如キ大抵前教師
ノ定ムル處ニ同シク科目下ニ列ス軍醫ポソルベ氏ハ其居宅出
島ニ於テ醫術ヲ教示ス生徒ハ松本良順氏はカ督トナリテ生
徒ヲ指示ス又舍密學ハ齋藤源藏輩數人其教示ヲ受ク又新ニ
馬數匹ヲ養ヒ教場ヲ造リ騎兵之術ヲ學フ其教師ハスコール
メーストル之ヲ司ル小笠原倉橋久保之諸士學生タリ機械工
ハ飽之浦製鐵所建築ニ從事シ我職工數人ヲ役ス

傳習之科目時間

自九時 自十時半 自二時 自三時

迄十時半 迄十二時 迄三時 迄四時

日曜日 休

船中帆前 運用 騎兵訓練

月曜日 船具 造船 算術 手銃

砲術築城 蒸氣

白鹿屯訓練 ミニユ一へ手銃手前

船中大砲 砲術築城 造船

航海 點竄 砲術築城 造船

騎馬訓練 運用 算術 蘭語

船具

火曜日

水曜日

船中帆前 蘭語 騎馬訓練 騎馬訓練

算術 造船 船具 運用

築城砲術 航海 點竄

拔隊罷 散兵

船中大砲 點竄 造船 砲術築城

木曜日

航海 蘭語 船具 運用

算術 下等士官心得

船中帆前 蒸氣 騎馬訓練 騎馬訓練

金曜日

蒸氣 地理 地理 地理

船具 航海 點竄

白鹿屯訓練 リニ一學

蒸氣

土曜日

歩兵調練

船掃除

騎兵調練 騎兵調練

稻佐郷ニ於テ

荷蘭新教師崎陽着後ヨリ歸國ニ迄ル傳習ノ結末

安政五戊午年五月三日蒸氣三桅艦「エド」號長崎ニ入ル此艦和蘭ヘ求メ咸臨艦同一之形ヲ以テ造製ヲ依頼セシ所ナリ當年咸臨艦ヲ江戸ニ廻シ此地傳習艦ニ乏シキ處幸ヒニシテ此艦入津大ニ教授ニ便ナリ後命名シテ朝陽艦ト稱ス同七月末英艦五六艘長崎ニ入ル艦隊長官ハ西軍門「セルム」氏ハ是上海邊コレヲ病大ニ流行スルニ遇ヒ且戰鬥之餘諸艦士之氣焰甚烈ナリ常規ニ因リ直ニ上陸シ且港内ニ突入ス忽チ市中コレヲ病發

シ死スル者無算幸ニシテ我生徒二三名水卒七八名ニ止リ皆劇症即日死ス痛ムヘシ軍醫「ボン」氏其豫防法ヲ建言シ又我輩モ「カラン」テ「レン」之建設ヲ云フ一時人心狂スルカ如ク晝夜鼓鉦之聲喧ク響キ烽火之光四方ノ峰頂ニ輝キ薄氷ヲ踏ムノ思ヲ爲ス九十月之候ニ到テ全ク跡ヲ絶ツカ如シ此病數十年前突如トシテ發シ中國九州地ニ傳播セリト其後絶ヘテ當年ノ如ク慘烈ニシテ且速カナルト無シト聞ク英艦ノ士之上陸スル井戸ヲ求メ其水ノ清濁ヲ察ス此地之民訛傳流言シテ云英人ノ毒ヲ流セルナリト且ツ各國軍艦ノ入津虛日無ク爲ニ大ニ教育ヲ妨ク又江戸之大喪官員之變換人心ノ洶ヤタル言ニ堪ヘサルアリ人孰レカ後途ヲ省顧セサラン哉我モ亦言ノ行ハレス大ニ退歩ヲ生スルヲ憂ヒ傳習ノ久ク維持ナシ難

キヲ點察ス

同年五月十一日伊澤謹吾望月大象榎本釜次郎春山辨藏飯田敬之助柴弘吉之諸氏帆前船鵬翔丸ヲ以テ南海ヲ乘リ歸府ス此船ハ觀光艦已ニ去リ咸臨艦未タ來タラス水卒多人數稽古ニ用ユヘキ船無キヲ以テ當港入津ノモノヲ贖ヒタルナリ之ヲ以テ諸帆運轉之用ヲ爲サシメ終ニ士官水卒大ニ熟達セシ故乘リテ以テ歸府セシメ江戸操練所ノ助ヲ成サシメントス

同年七月五日英艦四艘江戸品海ニ入ルスト―ムヤクトエンピロル號ヲ獻ス後ニ蟠龍艦ト稱モノナリ同月十八日我諸役出テ受之此艦六十馬力長徑廿二間製造堅牢ニシテ艦内之裝置甚美金碧燦爛トシテ頗ル人目ヲ驚カス是帝王之遊船ニ用

ユルモノ歐洲諸國新聞紙ヲ以テ咸之ヲ贊美ス他ノ軍艦ハ早々ニシテ品海ヲ去リ長崎ニ入ル

此時ヤ我カ幕府尤不幸之時ニシテ温恭公薨去アリ國內多事魯西亞國船江戸ニ入り談スル所アリ又繼續ノ紛議甚シク有司唯茫然タリ此際又新ニ外國奉行ヲ置ク數日ヲ出テス英艦是等ヲ悉了シ再渡ヲ約セシ歟我長崎ニ在テ其實ヲ盡クサスト雖モ江戸ヨリ來翰頻ニシテ其混雜言フヘカラスト云

一兩年前ヨリ外國條約トシテ我政府官吏ヲ派シテ各國へ使ヒセシムルノ舉アラントス我此際我軍艦ヲ以テ外國ニ航セントヲ思ヒ頻リニ建議シ又其方法ヲ議ス近日既ニ發途ノ令アラントスルヲ聞ク我決意シテ歸府ヲ乞フト再三